



# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（桓文社）  
「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」（人間の科学新社・共著）等

## 「ごっつお食べきり あったらもん（その1）」

春は歓送迎会の季節です。歓送迎会といえ、宴会、宴会とくれば、並ぶご馳走（たまにそうじゃないこともある）飲めや歌えのドンチャン騒ぎ（これもそうじゃないこともある）をイメージします。

「宴会で腹を満たそうなどと思っはいけない。あれは社交の場である。いいかね、付き合いとはそういうものなのだ。わかったかね?！」と大人のしきたりを説く御仁もいらっしやると思ひます。

とはいへ、時代は今、もったいないの時代、環境省でも「食品ロス削減運動」として「宴会時の食べ残しを減らすキャンペーン」を推進しております。その例が「30（さんまる）10（いちまる）運動」、宴会開始乾杯から30分間と閉会前10分間は席を立たずに自席で自分の料理を味わうように！との掟推奨です。

宴会ともなると、やけにはりきり、ここぞと自身や自社のPRに専念。主催者挨拶や乾杯の発声が終わるや否や、ビール瓶や名刺片手に上司や取引先に狙い定めてまっしぐら、挨拶・お酌・ハッハッハッ！となぜか3回笑い。あちこち回って、「ささ、どうぞ」「頂戴いたします」とぬるまっこなった気の抜けたビールを注いで注がれて飲んだふりしているうちに、綺麗どころの出し物やら、然るべき人の挨拶やらお説でメインの料理は口にできずに中締め、あきや、お開きになってしまいましたとき！ということが往々にしてあります。

「越後人のひとつ残し」（2009年11月号参照）の習慣が宴会に今もなお生きているせいか、食べ残しの

光景を目にするたび、もともとやあしんぼうの私などは、「あたらもんだ」と憂いておりました。そこで早速この「食べ残し減らし」がわが県ではどのようになっているか調査してみましたら、あつたてんがの県内に。その名もずばり、小千谷市の「ごっつお食べきり運動」です。食品ロス廃止の五箇条の一つ宴会開始20分と終宴前10分は自席で味わうことを謳っています。ほかに新発田市では「食の循環新発田モツタイナイ運動」が。糸魚川市では「20、10、0（ニイマル イチマル ゼロ）運動」（宴会初めの20分と終わりの10分前着席で食べ残し0）、妙高市では「もったいない、食べ残しゼロ運動」（宴会開始15分着席）がそれぞれ見られました。しかし、しかしです！国や他県では開始後30分・閉会前10分着席のいわゆる「さんまる いちまる運動」がなぜ、わが県の地域では15分や20分と短縮形か？といつもながら、どうでもいいこと（しかし、調べてみると意外な発見がある）が気になりだしました。そこで、今回はこの件と「ごっつお食べきりあたらもんだ」の県内事情を詳しくお届けいたす所存でございますので、今回はこれにてお開きにしたいと存じます。

